目次

はじめに …… 2
ESD-J　2011年度の成果ダイジェスト …… 4
数字で見る2011年度のESD-J …… 5

震災復興・地域再生支援にむけた対話の場づくり事業…… 6
　現地復興情報から ともに復興を進める情報発信 …… 7
　震災1　ESD-J全国ミーティングの開催 …… 8
　震災2　被災地の復興・再生と持続可能な社会づくりをつなぐ学び支援 …… 10
　震災3　『未来をつくるBOOK』の制作および発行・配布 …… 11

学校におけるESD推進事業…… 12
　学校におけるESDを進めるためにESD-Jとしてすべきこと …… 13

地域におけるESD推進とコーディネーターの社会化推進事業…… 14
　基本的な方向・方法は示されている、さあ実行しよう！ …… 15
　地域1　「ESD×生物多様性」プロジェクト …… 16
　地域2　ESDコーディネーターのあり方検討会
　　および関東ESD学びあいフォーラムの実施 …… 18

国際ネットワーク推進事業…… 20
　リオ+20を契機とする国連ESDの10年最終年に向けた国際取組みの強化…… 21
　国際1　ESDに関する内外の重要情報の収集・提供とそのための体制の強化 …… 22
　国際2　リオ＋20に向けた準備 …… 23

普及啓発、情報収集・提供および出版事業…… 24
　自立的な情報発信の充実へむかって …… 25
　普及1　ESD推進のための協働プロジェクト「＋ESDプロジェクト」の実施 …… 26
　普及2　機関誌「ESDレポート」の発行 …… 28
　普及3　活動成果普及のためのESD-J新リーフレットの制作・発行 …… 30

組織基盤強化事業…… 31

ESD-J2011年度活動履歴 …… 32
団体正会員・賛助会員・特別賛助会員・連携交流団体名簿…… 34
役員および実施体制…… 35
2011年度予算・決算見込 …… 36

※表記簡略化のため、文中の敬称は略させていただいております。

はじめに

ESD-J 代表理事　重　政子

2011 年度の ESD-J 事業報告にあたり詳細は本文に譲り、特記すべき事項について以下に概観します。

ESDをとりまく環境について

2011 年度の幕開けは、旧年度末、3 月 11 日の東日本大震災後、間もなく、被災地現場は元より、これらに関連する情報も錯綜し混乱する最中、人々はこの震災をきっかけに人としての価値観や、生きる力が問われる課題を突きつけられ、ESD-J としてもまた、団体組織の役割や姿勢をともに再考・再確認することから始まりました。

公的には、国連 ESD の 10 年の実施計画の見直しとして、震災後の ESD の役割について追記され、学校での取組みの推進が明記されるとともに ESD の「見える化」「つながる化」への取組みが強調されました。文部科学省は最終年会合の開催地を公募し、7 自治体の応募の中から、愛知県・名古屋市と岡山市が採択されました。ユネスコ本部では International Steering Group が設置され、2014 年の最終年会合のための議論や国際ワークショップも行われ、内容について議論が始まりました。このような背景のもと、民間側では「世界の祭典推進フォーラム」として、当会を含む ESD 推進機関が、最終年のビジョンを基に、どのような会議や事業を重ねていくことが必要かについて議論を展開してきました。

2014年目標と活動方針について

ESD-J は、ESD 推進期間 10 年の第三期（2009-2011）のまとめにあたり、「2014 年に具体的な成果を出す」ことを最重要課題と留意し、「2014 年目標と行動計画」として取り組んできた中から、ESD-J が主体的に取り組む部分を明確化し、1 月に「2014 年目標と活動方針（最終案）」を発表しました。

また、2014 年に向け ESD-J が何を目指しているのかを伝え、ともに活動する仲間を増やすためのツールとして、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」ラストスパートブックを制作しました。この取組みについて、9 つの企業から協賛を得たこと、また、広告代理店による CSR として制作協力を得ることができたことは ESD-J として大きな支援となりました。このリーフレットが、正に 2014 年目標への強い手掛かりとして活用されると確信しています。

2011年度の成果として

具体的な活動では、「2014 年目標と行動計画」の枠組みである「学校における ESD の推進」「地域における ESD の推進とコーディネーターの社会化」「広報・普及」に加え、ESD-J 設立当初より継続的に取り組んでいる国際ネットワークの形成と、東日本大震災を受けての ESD の役割探求という課題をふまえて、5 つの項目で事業計画を組み立てました。

主な成果は以下のとおりです。

① 震災復興・地域再生にむけた対話の場づくり

6 月の全国ミーティングは「現地の声が聞きたい」「ESD ができることを考えたい」という会員のニーズに応え、東北地元の関係者にお世話になりながら仙台で開催し、150 人の参加を得ることができました。非被災地での震災体験の風化を防ぐとともに、震災からの学びを各地の持続可能な地域づくりに生かしていく学びの場をつくることが ESD の役割として確認され、この取組みをサポートするツールとして、震災から学び、対話を生み出す ESD テキストブック『未来をつくる BOOK』を発行、書店販売を実現するとともに、モニター校に無償配布し今後の展開につなぐことができました。

② 地域における ESD 推進、コーディネーターの育成と社会化

「ESD× 生物多様性」プロジェクトのこれまでの成果を踏まえ、『わかる！ ESD テキストブック 3・生物多様性を大切にした地域づくりをはじめよう』を発行しました。

さらには、環境省関東地方環境事務所の「関東 ESD 学びあいフォーラム」を受託し、関東 1 都 9 県の多様な立場のコーディネーターとともに、スキルアップや社会的プレゼンスの向上に取り組むことの必要性を共有することができ、今後も関わっていきたいという意思を生み出すことができました。

③ 国際ネットワーク推進

リオ +20 に向けたマルチステークホルダーによる国内準備委員会に参加し、国内準備委員会による「成果文書へのインプット」に ESD の重要性、2014 年以降の行動計画の必要性等を盛り込むことができました。

また、バンコクにてアジアの NGO を中心とする国際ワークショップを開催し、リオ +20 に向けたアピールと、アジアネットワークづくりに向けたロードマップを作成しました。

④ ESD に取り組む組織や人、ESD を推進する組織につながるインフラの構築

多様なステークホルダーによる ESD 推進のためのプラットフォーム「＋ ESD（プラス・イー・エス・ディー）プロジェクト」の事務局を担い、さまざまな活動の登録を促進するとともに、多様な主体の連携による ESD 推進における課題と必要とされる施策に関する調査を行いました。

組織体制について

2014 年に向けた体制強化を目指し、Panasonic サポートファンドの助成を得、組織診断事業に着手、ESD 分野におけるポジショニング分析や、SWOT 分析を経て、事務局体制の強化、自主財源を生み出すプロジェクトの立ち上げ、2014 年に向け理事や会員のパワーを生かした事業の組み立てなどについて議論を深めてきました。地域担当理事による ESD-J ネットワークの強化は引き続きの懸案となっています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ESD-J は 2014 年の最終年会合を終えた後も ESD の普及・研究が着実に進む仕組みについて、さまざまなステークホルダーと連携し、「ESD 全国センター構想（仮称）」として打ち出そうとしています。本年度の報告・評価を基に新たな戦略に着手していくためにも、持続可能な未来をつくっていく会員としてのより一層の誇りと責務が期待されています。

ESDの実践支援およびテーマ研究と具現化への整理

震災復興・地域再生支援

ESD-J 全国ミーティングの開催 ☞ p8
『未来をつくる BOOK』の制作および発行・配布 ☞ p11

成果 1 全国ミーティングを仙台で開催、ESD 関係者としてできること・すべきことのヒントを得た

成果 2 東日本大震災を ESD 的な視点で捉えたテキスト『未来をつくる BOOK』を発行

ESD×生物多様性

「ESD× 生物多様性」プロジェクト ☞ p16

成果 1 生物多様性を大切にした地域づくりに取り組むテキストブックを発行

成果 2 先駆的実践者との関係を強化

成果 3 COP10 において ESD と CEPA のシナジーをアピール

ESDのプラットフォーム運用

＋ESDプロジェクト

ESD推進のための協働プロジェクト「＋ ESDプロジェクト」の実施 ☞ p26

成果 1 ESDの活動 119件、支援事業 9件、組織 160件を登録

成果 2 全国学びあいフォーラムで高密度な実践者交流を実現

成果 3 多様な団体と ESD-J との連携を強化

成果 4 分野等を超えたパートナーシップのポイントを整理

2011 年度は、東日本大震災に対応した ESD の実践支援を行うとともに、テーマ研究をさらに深化させ、具現化に向けた整理を一層進めました。また、ESD のプラットフォームの運用を軌道に乗せ、2014 年に向けた ESD 推進の連携・交流づくりに努めました。

コーディネーター育成

ESD コーディネーターのあり方検討会および関東 ESD 学びあいフォーラムの実施 ☞ p18

成果 1 関東の多様な分野のコーディネーターと以下の必要性を共有

- ESD のビジョンを共有すること
- コーディネーター同士が学びあい、スキルアップや社会的プレゼンスの向上に取り組むこと

国際ネットワーク

ESD に関する内外の重要情報の収集・提供とそのための体制の強化 ☞p22
リオ＋20 に向けた準備 ☞p23

成果 1 リオ +20、国連 ESD の 10 年最終年会合に向けた情報発信・意見交換が進展

成果 2 国際チームを発足

成果 3 リオ +20 成果文書への ESD 分野からの貢献

成果 4 アジアの ESD NGO ネットワーク構築に向けたロードマップを作成

数字で見る 2011年度のESD-J （ ）内は2010年度の数字

●ネットワーク （2012年3月末）

団体会員：**116団体**(109団体)
正会員87（83）、準会員15（15）
賛助会員8（6）、特別賛助会員 1（—）
連携交流団体5（5）

個人会員：**290名**(301名)
正会員115（117）、準会員175（184）

メルマガ登録者：**2,040名**(2,118名)

●事業

実施事業数：**14事業**(22事業)
共催・後援・協力事業数：**13事業**(15事業)

●情報発信

ウェブサイト記事発行数：**95記事**(149記事)
メルマガ：**10本**(16本)
会員メーリングリストの投稿数：**673本**(627本)

震災復興・地域再生支援にむけた対話の場づくり事業

2011年度成果報告

2011年度の重点項目

■ 震災を機に高まっている現在のライフスタイルや社会のあり方への問題意識の変化を捉え、各地・各主体の中に対話の場をつくりながら、被災地の復興・再生と非被災地の社会の再構築につなげていく。

2011 年度の主な事業

1）ESD-J全国ミーティングの開催

(☞p8)

震災復興における「ESD×生物多様性」を含んだ取組みを紹介し、震災復興やその他の地域づくりに生かすことを目的とした全国ミーティングを仙台で開催した。（6月25～26日開催）《一部、地球環境基金助成事業》

2）被災地の復興・再生と持続可能な社会づくりをつなぐ学び支援

(☞p10)

非被災地では、震災を機に高まっている現在のライフスタイルや社会のあり方への問題意識を、個人レベルから地域レベルへ広げ、行動につなげていく場として「ESDカフェ」やイベントなどを開催した。《理事・会員連係事業》

また、被災地でのESD的な取組み（地域の自然や資源を活用した、住民参加の地域再生など）を継続的に取材・紹介した。

3）『未来をつくるBOOK』の制作および発行・配布

(☞p11)

震災を機に見えてきたさまざまな社会の仕組みや矛盾などを題材に、大人と子どもが対話して考えるESDツールとして、震災後の出来事を踏まえたFACTBOOKを制作した。《日能研協賛事業》

現地復興情報から ともに復興を進める情報発信

理事/震災復興・地域再生支援事業担当：小金澤 孝昭
（宮城教育大学/仙台いぐね研究会）

2011年は、被災地域の復旧復興の取組みを継続的に全国に情報を発信してきました。このことは、被災地域にとっては、絶えず自分たちの取組みが全国に発信され、全国の人たちがさまざまな形で支援してくれるという安心感・連帯感をつくり出してきました。しかし、だんだん落ち着いてくると、被災地域以外の人たちは被災地をどのように見ているかがとても気になってきます。そこで、被災地以外から来る情報がとても重要になります。被災地域以外からの人たちの声が被災地域に届くような情報の発信や交流が大切になっています。その意味で昨年12月に北九州の人たちがチャリティー ·コンサートを開催して、応援メッセージや支援金を寄せていただきました。こうした遠く離れたところからエールが送られ、手紙となって情報が送られてくる関係が被災地域の人たちには元気を贈るものになります。また同時に被災地域の思いを被災地域の人が形にして、それを被災地以外の人たちが見て感想を送るような情報のキャッチボールも大切です。今年の3月に宮城県名取市のスーパーマーケット(イオン)で、津波によって町が全壊した「ゆり上」地区の子どもたちがつくった、津波前、津波時、津波のあとのこれからの3つの時期の紙粘土でつくったジオラマが展示されていました。この会場を訪れる人からたくさんのメッセージが寄せられていました。あるNPOは、これを日本全国のイオングループに展示してメッセージをもらう取組みをしたいと言っていました。これも情報のキャッチボールです。

2012年は、本格的な復興の年です。どんな復興をつくるのか？　どんな地域コミュニティーを再生するのか？　どんな子どもたちを育てる学校をつくるのか？　たくさんの「これから」のアイデアを出す時期に来ています。これからの情報は今を語るだけでなく、これからを語るものが求められています。しかし、現実に現地へ行ってみると、復興は遅々として進んでいません。たくさんのこれからのアイデアが衝突しているようです。これからを語ると同時にやはり、なぜ今が動かないか、その原因はどこにあるのか？　地域の人々は何をしたいのか？　何をしているのかといった現状をしっかり分析する作業が少し足りないような気がします。たくさんの人が現実を見て、なぜ復興が前に進まないのかを被災地の人も被災地以外の人も一緒に考える情報交流が必要になっています。気仙沼の復興の鍵は水産業を軸にする地域の産業の再構築です。このことはみんな知っています。しかし、気仙沼の産業構造や産業連関がどのように動いていたのか?どこから手を付ければ効果的に産業構造が再び動き出すのかは、なかなかわからないのが現状です。みんなが現地に集まり知恵を出す情報交流が必要な時期です。みんなで考えた分析結果を活用するのは現地の人々であっても、その分析を引き出すのはみんなで交流しながら進めればいいのです。たくさんの立場の違う人がいろんな角度から被災地調べを行い、その調査結果を共有できる情報交流の場(例えば雑誌)をつくると被災地の復興の手がかりになると思います。

たくさんの人が現地に来て考え、調べることが大切です。このこと自体が、調べるツアーになり、復興ツアーの1つとして効果的なものになるでしょう。今年の情報は現地を調べ、分析結果を共有し、復興のアイデアを出す知恵比べの情報が必要になると思います。どうぞ復興ツアーに来て被災地を調べませんか！

ESD-J全国ミーティングの開催

震災復興における「ESD×生物多様性」を含んだ取組みを紹介し、震災復興やその他の地域づくりに生かすことを目的とした全国ミーティングを仙台で開催した。(6月25～26日開催) 《一部、地球環境基金助成事業》

この事業でめざしたこと

年に一回、ESD関係者が集い、ESDの推進に資する場を提供することで、ESD-Jの求心力を強化する。

成　果

1. **震災後の混乱の中、全国ミーティングを仙台で開催でき、「現地の声が聞きたい」という多くの会員のニーズにこたえることができた。**
2. **ESD関係者として地元でできること・すべきことのヒントを、参加者それぞれが持ち帰ることができた。**

プロジェクトの体制

リーダー：　吉澤 卓
事務局：　村上 千里、小川 理恵、野口 扶美子、長澤 正嘉
協力者：　小金澤 孝昭、森 良、池田 満之、大島 順子、中川 哲雄(ライター)

事業の主なプロセス

■ 概要

日時：2011 年6 月25 日(土) ～ 26 日(日)
場所：宮城教育大学(仙台市)
主催：ESD-J
共催：仙台広域圏ESD・RCE運営委員会
後援：宮城教育大学
助成：地球環境基金

ESD-J全国ミーティング(仙台)

- 北海道から沖縄まで全国から約150人の参加者が集まり、仙台市教育委員会やNPO法人森は海の恋人、くりこま高原自然学校、南三陸町歌津の結組織・伊里前契約会など、ESDを通してつながりのある被災地の方たちから現状を報告いただき、ESDのネットワークとしてできることを2日間にわたって議論した。
- 仙台メディアテークの協力を得、u-stream配信を行うことができた。

■ 分科会後に集約・共有された「わたしたちにできること」

- 現場を見る
- 被災地と顔の見える関係を築く
- 経験を蓄積して語り継ぐ → 語り部事業
- 記録写真・映像等も含めた事例集を作成する
- 現地のニーズを外部につなぐ → ファシリテーター
- 多様な人の声を生かす → 誰でも入れるオープンな場づくり
- 教育の見直し、組立て直しを行なう → 現実を知って共感して動けるような授業
- 新たな「被災支援復興センター」の設立
- 支援物資のユニバーサルデザイン化

分科会の様子

討議した成果の共有

プロジェクトの自己評価

担当理事：吉澤 卓

発災のタイミングがたまたま年次の企画進行と重なって、理事間の合意も速やかにできたことと、地域担当理事や宮城教育大学のみなさんの多大なるご協力を得たことで実施することができたといえる。また、開催自体がその後のテキストブック発行なども含め、ESDネットワークにおける震災への関心を高め、継続することの一助とすることができた。

※ESD-J全国ミーティングの詳細については、「ESDレポート」27号に掲載しています。

被災地の復興・再生と持続可能な社会づくりをつなぐ学び支援

非被災地では、震災を機に高まっている現在のライフスタイルや社会のあり方への問題意識を、個人レベルから地域レベルへ広げ、行動につなげていく場として「ESDカフェ」やイベントなどを開催した。《理事・会員連係事業》 また、被災地でのESD的な取組み（地域の自然や資源を活用した、住民参加の地域再生など）を継続的に取材・紹介した。

この事業でめざしたこと

東日本大震災を機に高まっている現在のライフスタイルや社会のあり方への問題意識を、個人レベルから地域レベルへ広げ、行動につなげていくことで、ESD実践を広げる。

成　果

1. **ESD関係者が、各地でそれぞれに、震災をテーマに「ESDカフェ」やイベントなどを開催した。**
2. **会員メーリングリストは震災後の情報交換に役立った。**
3. **被災地の状況をESDの視点から伝えることができた。**

プロジェクトの体制

事務局：村上 千里　　協力者：吉澤 卓、全理事、中川 哲雄（ライター）

事業の主なプロセス

■ 各地での「ESDカフェ」やイベントなどの開催
ESD-J会員およびESD-J理事の取組みにより、ボランティア活動報告会、ランチョンセミナー、トーク＆チャリティーコンサート、ESDカフェなど、全国で震災をテーマとした各種イベントや研修等を実施した。

■ 被災地でのESDの取組みの取材・発信
「ESDレポート」および「ESD×生物多様性しんぶん」にて被災地にかかる各種取組みを発信した。

プロジェクトの自己評価

担当理事：小金澤 孝昭

ESD-Jとして、被災地域の現状や復旧･復興にどのように取り組んでいるのかといった事実経過をきちんと被災地域や非被災地域に継続的に情報発信したことは大きな実績といえる。この情報発信に際して、事実経過だけではなく、取材者の眼(非被災地域の眼)からみた報告がきちんと行なえたかが課題となる。なぜなら、被災地域から非被災地域への情報発信は同時に非被災地域から被災地域への情報発信にもなっているからである。被災地域にとっては、どのような情報が発信されるのか、またその結果、被災地域が非被災地域からどのように見られているのかが重要な関心事になっているからである。また被災地域の現状や新たな取組みの紹介も重要だが、何が被災地域の復興にとって重要なのかといった、具体的な復興の方向を議論できる現状分析を被災地域から非被災地域に送り、復興の方策を考える上での共通基盤をつくることが重要になる。そのため情報発信は、現状分析的な情報発信がそろそろ必要になる。

『未来をつくるBOOK』の制作および発行・配布

震災を機に見えてきたさまざまな社会の仕組みや矛盾などを題材に、大人と子どもが対話して考えるESDツールとして、震災後の出来事を踏まえたFACTBOOKを制作した。 《日能研協賛事業》

この事業でめざしたこと

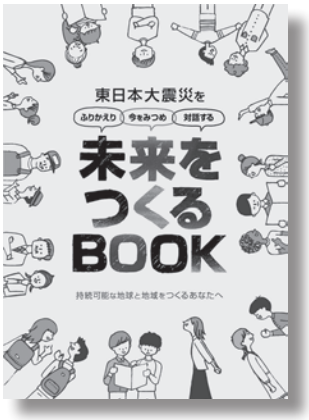
震災を機に見えてきたさまざまな社会の仕組みや矛盾などを題材に、大人と子どもが対話して考えるESD教材を作成する。

成　果

1 多くの関係者の協力により、東日本大震災をESD的な視点で捉えたテキスト『未来をつくるBOOK』を11月に発行することができた。

プロジェクトの体制

リーダー：　重 政子
事務局：　村上 千里
協力者：　日能研、永田 佳之、川嶋 直、中本 啓子、林 立彦、増田 泰二 ほか



『未来をつくるBOOK』

事業の主なプロセス

■ 概要

・ 東日本大震災をふりかえり、今を見つめ、対話する『未来をつくるBOOK』発行
　A4判、56ページ、表紙4色、中面2色
　発行部数：　贈呈用3000部
　　販売用2000部（みくに出版発売）

・ コンセプトは、主に被災地から遠く離れた場所に暮らす子どもや大人が、震災を通して見えてきたことを改めて思い出し、大切にしたいことは何なのかを深く見つめ、対話し、探る時間を持つきっかけとすること

■ 贈呈プログラム

12月から、小中学校を対象に、1クラス分の『未来をつくるBOOK』を贈呈するプログラムを実施。2月には対象を高校まで広げた。現在、小学校、中学校、高等学校に配布。本格的に授業で活用するのは2012年度から。

プロジェクトの自己評価

担当理事：重 政子

本教材の基本コンセプトは“自分で真実を探し、自分で問いを立てていくプロセスをつくりだしていくことこそ未来をつくることにつながる”として、その価値を共有するために、あらゆる情報のFACTがセレクトされ、編集会議は多くの時間を割いた。その成果は視野を広げ、観点を転化させ、思慮深く学びの多い作業として各原稿に反映された。

日能研の絶大なる支援を得て出版の運びとなった教材であることに深謝する。

学校におけるESD推進事業

2011年度成果報告

2011年度の重点項目

■ これまで教育委員会との連携によって取り組んできた、学校と地域をつなぐESD研修の成果を、各地に展開する。

2011 年度の主な事業

1)学校と地域の連携によるESD推進モデルづくり

学校や教育委員会、大学等に、学校と地域が連携したESD実践のノウハウなどを取り入れたESD普及のための研究会や研修を働きかけ、実施した。 《理事・会員連携事業》

＜ユネスコパートナーシップ事業の状況＞

- 2009年度から2年間、文部科学省ユネスコパートナーシップ事業を受託し、行ってきた教員研修および教育支援コーディネーター研修は、2011年度はNPO法人エコ・コミュニケーションセンターが受託し、稲城市で教員研修を実施。また、東京都の教育支援コーディネーターによるESD研修も実施した。
- 2009-2010年度に教員研修に取り組んだ多摩市では、独自予算で研修を継続。コーディネーターも配置し、主体的な展開を行っている。

＜ESD-J理事による展開＞

教育委員会、学校などを対象に各地でESD-J理事が研修等を実施した。

学校におけるESDを進めるためにESD-Jとしてすべきこと

理事/学校におけるESD推進事業担当：櫛田 敏宏
（愛知県総合教育センター /EPO中部ESD中部イニシアティブプロジェクト）

稲城市で行われている小中9年間を見通した地域課題の解決を目指した地域探究学習の事例、北陸で行われている学校教育目標にESDを位置づけ、その目標に向けて学校全体が一貫して取り組む事例、福岡県大牟田市の市立の34すべての小・中学校が教育長のトップダウンでユネスコスクールに加盟し、ESDを進める事例など、ESD-Jの理事が関わり、各地で学校におけるESDは広まっています。これからも地域担当理事を中心に、各地で各地に合った形の学校におけるESDを広めていくとよいと思います。いろいろなスタイルで進められているESDですが、これからはESDを実践する学校を増やすだけでなく、その質を高めることが重要です。質の高い事例をESD-Jとして全国に発信することはとても意義深いのではないでしょうか。

ただし、全国に発信する際に是非付け加えたいことは、単元案や授業案をどのようにつくるかということです。単元案や授業案のつくり方については国立教育政策研究所が3月に「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕」（http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf）を出しましたが、単元案や授業案のつくり方が明快に示されています。学校ではこの報告書の内容がESDの大きな指針になると思います。ただ、この報告書は単元案や授業案のつくり方が主であるので、地域課題の解決やESDを学校の教育目標とした学校全体のカリキュラムづくりなどの視点が入っていません。よって、ESD-Jが優秀事例を全国発信する際には、この報告書の指針を取り入れながら、ESDには地域課題の解決やカリキュラムづくりが重要であることを明記することが重要ではないでしょうか。

また、ESDの一番の肝は、問題解決能力の育成にあると思います。各地の実践を見ていて、ただの体験学習に終始してしまっている例が散見されます。学びの中で「なぜ？どうして？」を追究し、最終的には追究した問題の解決策、代替策まで到達し、そこで得られる充実感、肯定感を受容することで一つのステップが終了するのではないでしょうか。この一連の学びが幼稚園（保育園）から小学校、中学校、高等学校、大学とより高度なものへステップアップしていくことが重要です。地域に始まり、最終的には国、世界の問題を協働して解決していく力を育みたいものです。

地域探究学習は、地域循環（物質も経済も生物も）を大きな柱にしています。そのことは確かに重要な視点ですが、食料にしてもエネルギーにしても現状は地域循環で全ては賄うことはできません。食料は自給率40％、エネルギーは自給率4％の我が国において、どんなに頑張っても地域循環だけでは成り立ちません（一部地域のみならば成り立つかもしれませんが）。日本は貿易なくして持続は不可能です。食料やエネルギーの現状を把握し、国レベルでどのように考えるか、小学校高学年から中学校にかけては大きな探究課題です。このような課題解決のためのESDも今後重要だと思います。これからは、このような実践事例を増やすべきではないでしょうか。更に、食料やエネルギーだけでなく、1000兆円を超える財政赤字問題、ますます進む少子高齢社会と悪化する社会保障の問題、国の経済を左右するTPPの問題、憲法改正を含む国家安全保障の問題など地域だけでは解決できない問題が山積です。もちろん、地域課題からこれらの大きな課題を考えることも重要でしょう。しかし、それだけでは無理ではないでしょうか。これらの問題はもっとダイレクトに現状を見つめ、どう解決していくか考えることも重要ではないでしょうか。

ESD-Jとして学校にESDを普及するとともに、ESDの質の向上および小中学校だけでなく、高等学校や大学への接続まで言及し、その方法について提案していくことが重要ではないでしょうか。

地域におけるESD推進と
コーディネーターの社会化推進事業

2011年度成果報告

2011年度の重点項目

- ESD×生物多様性プロジェクトの集大成として、生物多様性を大切にした地域づくりのためのESDアプローチを広げていくハンドブックを制作する。
- 多様な分野のコーディネーター育成団体とともに、ESDの視点の導入に関する研究･検討を進める。

2011 年度の主な事業

1）「ESD×生物多様性」プロジェクト （☞p16）

生物多様性を大切にした持続可能な地域づくりの実践と人づくり（＝ESD）を地域で広げ、深めるための効果的なアプローチ方法やノウハウをとりまとめ、地域の人づくりのためのハンドブックを発行した。
また、ハンドブックの内容を検証し、豊かにする取組みとして、3カ所程度でモデル事業を実施した。さらに、上記モデル事業のプロセスや、震災復興における「ESD×生物多様性」の取組みを紹介する「ESD×生物多様性しんぶん」を発行した。 《地球環境基金助成事業》

2）ESDコーディネーターのあり方検討会および関東ESD学びあいフォーラムの実施 （☞p18）

関東地方1都9県のさまざまな立場のコーディネーターが集い、互いに知り合い、課題を議論し、ESDの価値を共有する場として、「ESDコーディネーターのあり方検討会」を開催するとともに、「関東ESD学びあいフォーラム」を実施した。 《環境省関東地方環境事務所請負事業》

基本的な方向・方法は示されている、さあ実行しよう！

理事/地域におけるESD推進およびコーディネーターの社会化事業担当：森 良
（エコ・コミュニケーションセンター）

内向きなESDからの転換が問われています。「ESD」という言葉を広げることが目的ではありません。すでにあるさまざまな実践の中からESDの質や価値を見出しそれらを共有化したりつなげたりすることがESD-Jの仕事です。だからコーディネーターが重要なのです。

ESD-JはESDコーディネーターの育成の方向について＜既存のさまざまな分野のコーディネーターにESDの視点を共有すること＞とし、そのための方法として＜①組込型研修（既存のコーディネーター研修にESDの視点を組込む）、②OJT型研修（自らの活動現場あるいは特定のフィールドにおいて当事者とともに実際の課題解決に取組みそれを振り返ることによってポイントをつかむ）を行う＞としています（2011年3月）。一年を経てもそれはまだ本格的には実行されていません。2012年から2014年の3年間をかけてしっかりとこれが実行できれば、「国連ESDの10年」は終わっても引き続きESDを継続・発展させていくことができるのです。基本的な方向はすでに示されている、さあ実行しよう！　というのがこの文で一番言いたいことです。

2011年度は、そのためのツールやベースが整備された年であると総括することができます。

① 「生物多様性を大切にした地域づくりを担う人づくりハンドブック」が発行された　→　持続可能な地域づくりのためにはどんなプロセスが必要か、各主体は何をすればよいか、コーディネーターの役割は何かなどのポイント・ノウハウが活用できる

② 関東において、1都9県から1人ずつ多分野のコーディネーターに集まってもらいコーディネーターの課題を整理し、一緒に課題解決を考えていくネットワークができた　→　課題解決を進めることにより、＜既存のコーディネーターにESDの視点を共有する＞ことができる

2012年度は、①をさまざまな学習と地域づくりの場で活用して、持続可能な地域づくりの取組みを広げていくとともに、その実践のなかでコーディネーター的な役割の人を見出しESDの視点を共有していくことが必要でしょう。

さまざまな学習と地域づくりの場としては、例として次のようなものがあげられます。　※（　）内はコーディネーター

- 過疎地の地域振興や都市の地域再生、両者を結ぶ都市農山漁村交流（集落支援員、地域おこし協力隊、生命地域再生コーディネーターなど）
- 被災地の復興・再生（特に産業の復興・雇用づくり）や放射能から子どもを守る活動
- 地域と学校の連携による教育再生（学校支援地域本部コーディネーターをはじめとした教育コーディネーター、オヤジの会やPTAのリーダー、ユネスコスクールのリーダーなど）
- まちづくり、生涯学習、市民活動支援（中間支援組織のコーディネーターなど）
- コミュニティケアや福祉の充実、ネットワーク化を図る活動（ソーシャルワーカー、ケアワーカーなど）
- 多文化共生の地域づくり（NGO相談員、国際協力支援員、多文化共生のNGO・NPOなど）
- 生物多様性を大切にした地域づくりなど環境まちづくり（生物多様性アドバイザー、鳥獣害防止管理者など）

このほかにもさまざまな取組み、場があげられるでしょう。大事なのは、いま・このときに自分の場で起きていること、取り組まれていることなのです。

「ESD×生物多様性」プロジェクト

生物多様性を大切にした持続可能な地域づくりの実践と人づくり（＝ESD）を地域で広げ、深めるための効果的なアプローチ方法やノウハウをとりまとめ、地域の人づくりのためのハンドブックを発行した。また、ハンドブックの内容を検証し、豊かにする取組みとして、3カ所程度でモデル事業を実施した。さらに、上記モデル事業のプロセスや、震災復興における「ESD×生物多様性」の取組みを紹介する「ESD×生物多様性しんぶん」を発行した。　《地球環境基金助成事業》

この事業でめざしたこと

生物多様性の10年がスタートし、自治体や生物多様性関係者の関心が高まるであろう流れに沿って、ESDの普及を図る。

成　果

1. **各セクターが生物多様性を大切にした地域づくりに取り組む際のアプローチ方法などをとりまとめることができた。また、それらを地域づくりの実践者に伝えるツールとして、テキストブックとウェブサイトを構築することができた。**
2. **3年間の事業を通して、全国各地で生物多様性を大切にした地域づくりに取り組む先駆的実践者との関係を強化することができた。また、生物多様性の普及啓発をけん引していくネットワークとの協力関係も生まれ、ESD的アプローチを広げていくベースを築くことができた。**
3. **国際社会においては、COP10において、IUCNや生物多様性条約事務局のCEPA担当者らと、ESDとCEPAのシナジーについて議論し、その成果をアピールすることができた。**

プロジェクトの体制

リーダー：　森 良
事務局：　村上 千里
協力者：　佐藤 孝俊（エイエイピー）、名執 芳博（長尾自然環境財団）、服部 徹（CEPA JAPAN）、重 政子

事業の主なプロセス

■ ハンドブック
わかる！ ESDテキストブック3『生物多様性を大切にした地域づくりをはじめよう』を発行
　B5判、64ページ、表紙4色、中面2色
　発行部数：配布版800冊（地球環境基金助成）
　　※2012年度、販売版（みくに出版発売）を増刷予定

■ 人材育成モデル事業

以下の3プロジェクトを実施。

①地域とともに獣害を考える（岡崎市立新香山中学校，愛知県総合教育センター）

②世界の生物多様性を学べる動物園に（愛媛県立とべ動物園、NPO法人園DEピース、NPO法人えひめグローバルネットワーク）

③都市農山漁村交流で棚田の再生へ（安房鴨川と板橋区高島平の住民グループ）

■ ESD×生物多様性しんぶん

「ESD×生物多様性しんぶん」（A4判・6,000部）を年3回発行

・人材育成モデル事業の進捗をレポート。また、「震災復興にみる生物多様性×ESD」と題し、森は海の恋人、日本の森バイオマスネットワーク、東北大学グリーン復興プロジェクトの取組みを紹介した。

わかる！ ESDテキストブック3
『生物多様性を大切にした地域づくりをはじめよう』

ESD×生物多様性しんぶん

プロジェクトの自己評価

担当理事：森 良

「生物多様性を大切にした地域づくり」は、「愛知ターゲット」の実現に向けた「国連生物多様性の10年」の地域における主要な展開の柱となる活動である。これまで希少種の保護や自然の豊かな地域、里山・里海・里川の保全などとしてしか理解されてこなかった生物多様性の保全を持続可能な地域づくりとして推進すること、およびそのための具体的な方法をテキストブックとして取りまとめたことの意義は大きい。

この内容を、今後、生物多様性関連のNGO（IUCN-Jにじゅうまるプロジェクト、CEPAジャパン、生物多様性の10年市民ネットなど）や自治体、企業に提起し、地域で具体的に進めていくきっかけづくり、場づくりを担っていくことが重要である。

ESDコーディネーターのあり方検討会
および関東ESD学びあいフォーラムの実施

関東地方1都9県のさまざまな立場のコーディネーターが集い、互いに知り合い、課題を議論し、ESDの価値を共有する場として、「ESDコーディネーターのあり方検討会」を開催するとともに、「関東ESD学びあいフォーラム」を実施した。 《環境省関東地方環境事務所請負事業》

この事業でめざしたこと

さまざまなテーマ・分野のコーディネーターに、ESDの考え方やノウハウを共有し、ESDの視点を持ったコーディネーターのネットワークを形成する。

成　果

関東1都9県の多様な分野のコーディネーターとともに、

- **ESDのビジョンを共有すること**
- **コーディネーター同士が学びあい、スキルアップや社会的プレゼンスの向上に取り組むこと**

の必要性を共有することができ、今後も関わっていきたいという意思を生み出すことができた。

プロジェクトの体制

リーダー：　森 良
事務局：　村上 千里、小川 理恵
協力者：　関東一円のコーディネーター

関東ESD学びあいフォーラム

事業の主なプロセス

■ 実施概要

1） 関東一円の多様な分野のコーディネーターのヒアリング調査（10名）

2）「ESDコーディネーターのあり方検討会」の開催（10名）

2012年1月23日（月） 13:00-17:00

関東一円の多様な分野のコーディネーターが集まり、コーディネーターの抱える課題とその解決方策を検討した

3）「関東ESD学びあいフォーラム」の開催（参加者：50名）

2012年2月27日（月） 13:30-17:00

［分科会］ A：行政と市民の関係のあり方

B：市民のエンパワーメント

C：コーディネーターのスキルアップ/ネットワーキング

■ アウトプット

終了後、10名のコーディネーターとともに今後の取組みの方向性について議論し、以下のアウトプットを得た。

① コーディネーターの課題を深める場 を継続的に持つ（合宿も検討）

② 「関東ESD学びあいフォーラム」のような 共有・交流する場 を継続する

各県・各地域で実施 → 関東フォーラム を行う

分科会の様子

プロジェクトの自己評価

担当理事：森 良

「関東ESD学びあいフォーラム」を手掛かりに関東地方における多分野のコーディネーターの課題の整理・共有ができたことはESDコーディネーターの育成事業にとって大きな取っ掛かりとなった。コーディネーターの課題のポイントは、参加型の地域づくりとそれを担う市民のエンパワーメントが重要であり、そのためにESDの価値（考え方、方法）の共有を進めることが大切だということである。

それを受けてこれから具体的に進める必要があるのは、行政に参加型の地域づくりと市民のエンパワーメントを位置付けてもらうことおよびESDの価値の共有の具体化である。

国際ネットワーク推進事業

2011年度成果報告

2011年度の重点項目

■ 国際的な動きを国内へ、日本の動きを国際社会へ、受発信する機能を高めるための体制づくりに取り組む。

2011 年度の主な事業

1）ESDに関する内外の重要情報の収集・提供とそのための体制の強化 (☞p22)

ユネスコほかESDを進める国際主要機関が発信する関連情報を国内に提供するとともに、ESD-Jの取組みを海外へ発信した。また、情報収集のための会員内外の関係機関、研究者、実践者などとの連携関係を強化した。 《理事・会員連携事業》

2)アジアESDネットワーク再構築に向けた実践

2010年に開催したアジアESDネットワーク形成ワークショップにおいて共有した行動計画メニューを、ひとつずつ実行していくためのファンドレイズに取り組んだ。

3)リオ＋20に向けた準備 (☞p23)

リオ+20に向けた市民セクターの活動と連携しながら、ESDに取り組むことの必要性を国際社会にアピールする準備を進めた。

リオ+20を契機とする国連ESDの10年最終年に向けた国際取組みの強化

理事/国際ネットワーク推進事業担当　鈴木　克徳
（金沢大学）

2011年度は、2012年6月のリオ+20を間近に控え、さまざまな国際活動が活発に行われるとともに、それらの主体間の情報・意見交換も活発に行われた重要な年でした。

国内では、従来から行われているESD関係機関会合やNGO連携会合などに加え、さまざまなステークホルダー・グループによる「リオ+20国内準備委員会」が組織され、2回にわたる公開ワークショップ等での討議結果を踏まえ、リオ+20成果文書に対するインプット文書を提出しました。このインプット文書には、「持続可能な社会づくりのためには人づくり（ESD）が基盤であること」、「2014年の国連ESDの10年最終年はESDの終了年ではなく、次のステップに向けた新たな始まりであり、2015年の行動計画づくりが期待されること」等が明記されています。また、国連ESDの10年最終年会合を2014年に日本の岡山市と愛知県・名古屋市で開催することも決定され、最終年会合に向けたさまざまな活動も活発化しました。

そのような動向を踏まえ、ESD-Jは、国内外のESD関係機関との情報・意見交換を活発化させるとともに、国際分野での活動を強化するための国際チームを発足させました。現時点では、国際問題に造詣の深い理事を中心とする比較的小規模なチームですが、今後、ESD-J会員への周知を進め、ボランティアやインターンを含む、より広範なメンバーの参加を期待したいと考えています。2011年度には、関係機関との情報・意見交換は飛躍的に増えましたが、ESD-J会員の皆さんとの情報交流は、当初期待したほどには実施できませんでした。今後、国際チームの強化により、2014年に向けたESD-J会員の皆さんとの国際分野での情報の交流や連携を格段に強化したいと考えています。

アジアのNGOによるESDネットワーク（Asia NGO network on ESD: ANNE）の2014年設立に向けた準備活動を進めました。地球環境基金の支援を得て、2012年1 ～ 2月にかけて、アジアのESD関係NGOに対するアンケート調査を実施し、ネットワークに対する期待と具体的にそれぞれの団体が実施できる貢献内容等を調べるとともに、それらの結果を討議するための国際ワークショップを3月にバンコクで開催しました。ワークショップの成果として、2014年のネットワーク設立に向けたロードマップを作成するとともに、アジアのESD関係NGOからリオ+20に向けたメッセージを作成しました。

2012年度においては、リオ+20に際し、アジアのNGOからのメッセージをアピールするためのサイドイベントを開催するとともに、秋には、リオ+20の成果を2014年に向けてどのように活用するかを検討する国際フォーラムを日本で開催したいと考えています。

2010年8月にESD-Jがインドネシア・スラバヤで開いた国際ワークショップで、アジアのNGOによる具体的な協働プロジェクトが重要であると強調されました。残念ながら、2011年度にはそのような協働プロジェクトの採択には至りませんでしたが、2012年度にはぜひ、アジアのESD協働プロジェクトを立ち上げたいと考えています。

これらの活動を通じ、UNESCOやUNEPのような国連機関、UNCSD Education Caucusのようなグローバルな ESD推進NGO連合体との情報･意見交換も格段に進展しました。今後、2014年およびそれ以降のESD推進に向けて、国際活動の着実な強化を図っていきたいと考えます。

ESDに関する内外の重要情報の収集・提供と そのための体制の強化

ユネスコほかESDを進める国際主要機関が発信する関連情報を国内に提供するとともに、ESD-Jの取組みを海外へ発信した。また、情報収集のための会員内外の関係機関、研究者、実践者などとの連携関係を強化した。 《理事・会員連携事業》

この事業でめざしたこと

リオ+20関連の動きを収集、発信するとともに、国連ESDの10年最終年会合に向けた情報を収集、発信する。

成 果

1. **リオ+20、国連ESDの10年最終年会合に向けたESD-J活動の国際的発信、国内関係機関との情報・意見交換が進展した。**
2. **懸案であった国際チームを発足させることができた。今後、国際チームの拡充に向けた検討を進める。**

プロジェクトの体制

リーダー： 鈴木 克徳
事務局： 野口 扶美子
協力者： 阿部 治、山下 邦明、名執 芳博、重 政子、池田 満之、吉澤 卓、村上 千里

事業の主なプロセス

- 第17回(6/16)および第18回(12/9)持続可能な開発のための教育に関する関係機関間情報交換会議に参加
- 国連ESDの10年最終年会合に向けた意見交換会(3/23)に参加
- 第1回リオ+20 NGO×政府 意見交換会(11/9)に参加
- アジアのESDに関するNGOネットワーク会合でのリオ関連議論の情報共有およびNGOネットワークの動向に関する情報発信
- 環境省および地球環境戦略研究機関(IGES)主催のNGO連携会合(3/15)の開催を支援
- 国際チームを発足(初期メンバーは、鈴木克徳、阿部治、名執芳博、山下邦明、野口扶美子)

プロジェクトの自己評価

担当理事：鈴木 克徳

1) 国内の ESD 関係機関との情報・意見交換が進められていることを評価。他方、ESD-J 会員に向けた発信には、まだ多くの改善余地がある。
2) リオ +20 に向けたプロセスにより、ユネスコ、UNEP 等の国連組織との情報交換は格段に強化された。今後とも、このような情報交換を継続していくことが重要である。
3) 国際チームが発足したことは、今後の国際分野の活動の強化に向けて評価される。国際チームに関する情報が会員に十分周知されるよう、今後、国際チームの強化拡充に向けた周知活動が重要。

リオ＋20に向けた準備

リオ+20に向けた市民セクターの活動と連携しながら、ESDに取り組むことの必要性を国際社会にアピールする準備を進めた。

この事業でめざしたこと

リオ+20に向けて、ESDに取り組むことの必要性を国際社会にアピールする。

成　果

1. **リオ＋20国内準備委員会（以下「国内準備委員会」という）委員および国内準備委員会サポートグループ会合メンバーにESD-J理事が就任し、リオ+20成果文書のゼロドラフトへの「国内準備委員会からのインプット」へのESD分野からの貢献を行った。**
2. **アジアのNGOからのリオ+20に向けたメッセージを作成し、また2014年までのアジアのESD NGOネットワーク構築に向けたロードマップを作成した。**

アジアのNGOによるESDネットワーク・バンコクワークショップ

プロジェクトの体制

リーダー：　鈴木 克徳
事務局：　野口 扶美子
協力者：　阿部 治、山下 邦明、名執 芳博、重 政子、池田 満之、村上 千里

事業の主なプロセス

- ■ リオ＋20国内準備委員会　7月13日、8月23日、9月14日、10月11日、2月1日　の計5回
- ■ リオ＋20国内準備委員会ワークショップ　9月1日、10月2日　の計2回
- ■ 国内準備委員会サポートグループ会合　随時参加
- ■ アジアのNGOからのリオ+20に向けたメッセージの作成、2014年までのアジアのNGOによるESDネットワーク構築に向けたロードマップの作成
  - ・リオ＋20においてアピールしたい事項に関するアンケート調査の実施
  - ・アジアのNGOによるESDネットワーク・バンコクワークショップの開催
    日時：2012年3月10～11日　主催：ESD-J　共催：UNEP

プロジェクトの自己評価

担当理事：鈴木 克徳

1) リオ +20 国内準備委員会からのインプットに、ESD の重要性と 2014 年以降の活動に向けた行動計画提案を盛り込めたことは、世界に向けた日本からの発信として極めて重要な成果。また、国内準備委員会の活動を通じ、国内の他のステークホルダーとの対話が著しく増大したことも高く評価される。
2) アンケートとタイでのワークショップを通じ、アジアの NGO による ESD ネットワークの実現に向け、具体的なロードマップが描けたことは大きな成果。また、アジアからのリオ +20 へのメッセージ作成により、リオ +20 に向けたアジアの NGO の認識も向上した。これらの活動により、それぞれの NGO によるネットワークへのオーナーシップ意識が高まったことも重要。
3) 今後、アジアの NGO による ESD 協働事業を実現できるよう、さらにファンド・レイジング活動を進めたい。

普及啓発、情報収集・提供および出版事業

2011年度成果報告

2011年度の重点項目

- ＋ESDプロジェクトを、官民連携のESD推進の基盤システムとして活性化する。
- ESD-Jの2014年に向けたこれまでの活動と成果を分かりやすい形に取りまとめ、発信する。
- ツイッターや動画配信など新たなメディアツールの可能性を探る。

2011 年度の主な事業

1）ESD推進のための協働プロジェクト「＋ESDプロジェクト」の実施 （☞p26）

＋ESDプロジェクトへの参加登録件数を増やし、多様なESD活動を可視化するとともに、関係省庁のESD推進施策を一元化したページづくりや、ESDに関する情報を発信することで、ESDの活性化につなげた。また、「＋ESDプロジェクト全国学びあいフォーラム2011」を開催するとともに、地域での交流・学びあいフォーラムの開催を支援した。さらに、多様な主体の連携によるESD推進における課題と必要とされる施策に関する調査を行った。 《環境省請負事業》

2）機関紙「ESDレポート」の発行 （☞p28）

今年度の事業の柱（＝2014年にむけた行動計画の柱）に沿った実践事例収集と分析、情報発信に努めた。

3）活動成果普及のためのESD-J新リーフレットの制作・発行 （☞p30）

ESD-Jの2014年目標および重点アクションプランを発信し、広くESDおよびESD-Jへの参加を呼びかける新リーフレットを制作した。 《企業協賛事業》

4）講師派遣

ESDに関連する各種講演や研修等の依頼に応じて、ネットワークから適切な講師を派遣した。

5）各種メディア（ウェブ、メールマガジン等）を通じた情報発信

誌面媒体以外にも、さまざまなメディアを通じてESDの理解と普及を促進した。特に電子メディアならではの活動プロセスやイベント案内、会員間のコミュニケーションなどタイムリーな情報発信に努力した。

自立的な情報発信の充実へむかって

理事/普及啓発・情報収集・提供事業担当：吉澤　卓
（個人会員）

2011年度は、事務局スタッフ体制が十分でない中、＋ESDプロジェクト事務業務進行や、ESDレポート作成、仙台での全国ミーティング開催など事務負荷の高い要素が「普及啓発・情報収集・提供」事業担当には多かった。「情報発信」はネットワーク団体として必須の要件であり、今後とも質的にも量的にもニーズの高いテーマであるが、人的資源を割かずに上手な取り回しをしていくことがますます必要になっている現状と考えられる。

事務局に際しては、ウェブサイトの更新作業をこまめに行えるような体制、ノウハウの共有が求められるほか、インターネット上のソーシャルサービスが会員内でも活用事例が増えていることなどを念頭においたウェブサイトのリニューアルなども、ファンドレイズとともに行っていくことも考える必要がある。

理事をはじめ、会員のみなさんには、自身の関係するサイトでの発信情報の会員メーリングリストでの共有や、ソーシャルサービスの活用を通じた、幅広い層への情報発信を積極的に行うようお願いするほか、理事・事務局が連携してソーシャルサービス活用のセミナーなども提供できるよう、次年度の企画につなげていきたい。

＋ESDプロジェクトは、残念ながら2012年度の事務局業務を受託することができなかった。しかしながら、実質的に事務局業務以外のこととして、当プロジェクト･ウェブサイトはESDに関するフラッグシップ施策でもあるため、ESD-J事務局ならびにESD-Jのネットワーク全体で活用していくことがひきつづき求められる。そのうえで、適切なフィードバックを行い、今後のESD推進により効果のあるプロジェクトになるよう働きかけを行うべきと考える。

ESD推進のための協働プロジェクト「＋ESDプロジェクト」の実施

＋ESDプロジェクトへの参加登録件数を増やし、多様なESD活動を可視化するとともに、関係省庁のESD推進施策を一元化したページづくりや、ESDに関する情報を発信することで、ESDの活性化につなげた。また、「＋ESDプロジェクト全国学びあいフォーラム2011」を開催するとともに、地域での交流・学びあいフォーラムの開催を支援した。さらに、多様な主体の連携によるESD推進における課題と必要とされる施策に関する調査を行った。（環境省請負事業）

この事業でめざしたこと

ESDの実践の「見える化」によるESDの認知度向上、連携促進を図るとともに、「つながる化」によって交流・学びあいを促進し、地域の活動の活性化を図る。これにより、広くESDの普及・一般化を図る。

成　果

1. **年度末時点で、ESDの活動119件、支援事業9件、組織160件の登録を得ることができた。**
2. **全国学びあいフォーラムでは高密度な実践者交流を行うことができたとともに、地域学びあいフォーラム等を通して＋ESDプロジェクトの認知度向上を図ることができた。**
3. **普及委員会をはじめとして、多様な団体とESD-Jとの連携強化を図ることができた。**
4. **「分野やセクターを超えたパートナーシップによるESD」を支援する上で重要なポイントは、**
   - **市民社会における人材育成と、それが不可能な場合の外部調達を可能とする仕組み**
   - **新しい公共を支える財政基盤の確立**
   - **行政の意識改革**

   であることを整理した。

プロジェクトの体制

リーダー：　枚本 育生
事務局：　長澤 正嘉、吉澤 卓、村上 千里、小川 理恵
協力者：　森 良、池田 誠ほか

事業の主なプロセス

■ システムの運用および改良
- 「政府による取組」、「ESDを進めるヒント」のページ新設
- 「各分野の取組とESD」、「学びあいフォーラム」のページリニューアル

■ 委員会の開催

2011年7月26日：＋ESDプロジェクト普及委員会・第1回幹事会

2011年9月29日：＋ESDプロジェクト普及委員会・総会

2012年2月17日：＋ESDプロジェクト検証検討委員会

2012年2月28日：＋ESDプロジェクト普及委員会・第2回幹事会

■ ＋ESDプロジェクトに関する調査

＋ESDプロジェクトに関するアンケート調査

＋ESDプロジェクトに関するヒアリング調査

■ 広報・参加促進

■「＋ESDプロジェクト全国学びあいフォーラム2011」の開催

2011年10月16日　　JICA地球ひろば（東京・広尾）

■ 地域学びあいフォーラムにおける情報発信

■ パートナーシップ事例調査

全国から10件のパートナーシップ事例を抽出し、ヒアリング調査を実施、分野やセクターを超えた連携を進めるうえでの阻害要因とその克服方法を抽出し、とりまとめた。

＋ESDプロジェクト全国学びあいフォーラム2011

ユネスコスクール全国大会での広報活動

プロジェクトの自己評価

担当理事：枚本 育生

1) ＋ ESD プロジェクトの推進システムを構築できたことは評価できる。

2) 関係省庁および ESD-J として、活動登録を増加させるための組織的な取組みは不足していた。

3) 全国学びあいフォーラム、地域学びあいフォーラムとも一定の成果は得たが、参加者が表彰事例を選んでいくような仕組みや、参加者同士や助成機関を含めたシナジーを起こせるような交流の時間や場の設定が不十分。

4) 請負事業のため、ESD-J としてのポリシーが発揮しきれていない。

機関紙「ESDレポート」の発行

機関誌「ESDレポート」を発行し、情報の提供を行うとともに、今年度の事業の柱（＝2014年にむけた行動計画の柱）に沿った実践事例収集と分析、情報発信に努めた。

この事業でめざしたこと

ESDに関する情報の提供、認知度アップを図るとともに、ESDの事例報告や会員の活動、視点紹介などじっくり読む情報を発信する。

成　果

1. **本年度事業計画の新しい柱である「震災復興・地域再生支援にむけた対話の場づくり」に沿った情報の発信ができた。**
2. **震災に関する特集記事は、一般からの関心も高く、会員からも良好な評価をいただいた。**

プロジェクトの体制

リーダー：　吉澤 卓
事務局：　長澤 正嘉、村上 千里、牧野 真弓
編集･執筆･協力：　情報関連プロジェクトメンバー、各執筆者、各取材対象者

事業の主なプロセス

- 26号　編集会議は前年度　→　4月15日発行
- 27号　6月16日編集会議　→　8月25日発行
- 28号　12月20日編集会議　→　3月26日発行

プロジェクトの自己評価

担当理事：吉澤 卓

1）事務局体制の見直しに伴う年間 3 回の発行への移行は適切なものだったと考える。
2）今後、紙面での発信を主軸にしながらも、適切なタイミングでのウェブ発信との連動などを行うスタイルを検討していくことを提案したい。

26 号　＜特集＞ CSR×ESD

◆学びの場をデザインする

CSR × ESD で開発する研修～次世代CSR としてのサステナビリティ

◆つなぐ人の視線

企業･NPO･地域/ 社会のwin-win-win　NPO とのパートナーシップが､CSR に効く！

◆数字でみる“社会”：ISO26000

◆身近な活動のESD らしさ：地域貢献を社員がつなぐ

◆会員リレーコラム：賛助会員編

◆ESD-J の活動紹介: 企業協働事業「東洋製罐株式会社 環境コミュニケーション 戦略対話」

◆トピックス：地球と地域の未来をつくる「＋ ESD プロジェクト」が本格スタートしました

27 号　＜特集＞震災からの再生 ×ESD　ESD-J 全国ミーティング 2011 の報告

◆被災地からの報告1　森と海を大切にした地域復興の取り組み

◆被災地からの報告2　地域の資源と人材を生かした復興住宅や経済復興の試み

◆被災地からの報告3　南三陸町歌津の地域復興に向けた試み

◆被災地からの報告4　気仙沼市教育委員会の活動事例

◆復興におけるコミュニティ支援について

◆全国ミーティング2011のまとめ

◆震災支援の活動紹介

◆トピックス：個別課題に関するESD-Jの役割についてのアンケート結果報告

28 号　＜特集＞震災からの再生 ×ESD　vol.2

◆被災地からの報告1：子どもの笑顔あふれる学校と地域学習の実践をめざして

◆「3.11 あの時　東日本大震災3 月11 日14 時46 分からの物語」

◆被災地からの報告2：福島からの提言.

◆東日本大震災からはじまる被災地外での学び

◆『未来をつくるBOOK』で、震災から学ぶESD を

◆会員リレーコラム：個人会員、団体会員

◆ESD－Jの活動紹介：わたしたちにとってのESD らしさ

◆トピックス：リオ＋ 20 に向けたESD 関係者からの提言

活動成果普及のためのESD-J新リーフレットの制作・発行

ESD-Jの2014年目標および重点アクションプランを発信し、広くESDおよびESD-Jへの参加を呼びかける新リーフレットを制作した。　（企業協賛事業）

この事業でめざしたこと

ESD-Jの2014年目標と活動方針を、わかりやすく伝え、ESD-Jのメンバーを増やすためのツールを制作する。

成　果

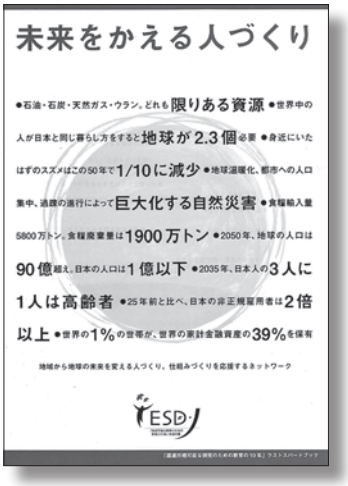
1. **ESD-Jがこれまで取り組んだ活動とその成果を整理し、会員および関係者への理解を促すとともに、2014年の目標およびESD-Jの重点アクションプランを発信し、広く参加を呼びかける新リーフレットを制作した。**
2. **この取組みには、9社の協賛と、広告代理店によるCSRとして制作協力を得ることができた。**

プロジェクトの体制

リーダー：　吉澤 卓
事務局：　村上 千里
編集･執筆･協力：　重 政子、鈴木 克徳、山下 邦明（以上、協賛集め）、博報堂

事業の主なプロセス

■ ESD-J新リーフレットの概要
「国連持続可能な開発のための教育の10年」ラストスパートブック
・B5判、16ページ、フルカラーの冊子
・5000部を印刷（2014年までに20,000部を予定）
協　　賛：アサヒビール株式会社、王子製紙株式会社、キヤノンマーケティングジャパン株式会社、損保ジャパン環境財団、電源開発株式会社、日経BP環境経営フォーラム、日能研、株式会社日立製作所 情報・通信システム社、株式会社モンベル
制作協力：株式会社博報堂



「国連持続可能な開発のための教育の10年」ラストスパートブック

プロジェクトの自己評価

担当理事：吉澤 卓

前年度からの持ち越しであったが発行にこぎつけることができた。制作プロセスには課題があった。今後、団体の総意を必要とする制作物に関しては、プロセスに関しての理事間の合意とそれに基づく適切なタイミングでの内容検討をもって進行を行うべきと考える。今回は、とくにCSRの一環として制作協力をうけたこともあり、団体としての信頼感を損なわないような行動となるよう、以降は準備を万全にしたい。

組織基盤強化事業

2011年度成果報告

NPOの組織運営に必要なマネジメント項目に沿って組織の現状を分析し組織課題を把握する組織診断を行った。　(Panasonic NPOサポート ファンド 助成)

この事業でめざしたこと

2015年以降、ESDを着実に推進する仕組みをつくるために、ESD-Jのなすべきことを明らかにし、そのための組織体制をつくる。

成　果

1. **外部専門家の協力のもとで、ESDをとりまくポジショニングマップの作成や、組織のSWOT分析などの組織診断に取り組んだ。また、その結果を踏まえ、2010年度に発表した「ESD-J2014年目標と活動計画」ドラフトをさらに絞り込み、2012年2月に活動方針の最終案を公表した。**
2. **2014年までの取組みの核として**
   - **ESDコーディネーター育成の事業化とコーディネーターのネットワーク化**
   - **学校と地域の協働によるESDの推進**
   - **「ESD全国センター構想(仮称)」をESD推進機関との連携で策定・提案**

   を定めた。(2012年度事業計画に反映させる予定)
3. **「2014年目標と活動方針」最終案を会員に示したうえで、理事選挙を行い、2014年までの執行体制の基盤づくりに取り組んだ。**

プロジェクトの体制

リーダー：　池田 満之
事務局：　村上 千里
協力者：　全理事、早瀬昇(大阪ボランティア協会)

事業の主なプロセス

①7月9日　公開ワークショップ
②11月6日　理事ワークショップ(1)
③12月10日　理事ワークショップ(2)
④1月8-9日　理事ワークショップ(3)
⑤1月14日　臨時総会、理事会
⑥1月31日　「ESD-J2014年目標と活動方針」最終案の確定
⑦1月31日－3月12日　理事選挙
⑧3月20日　理事ワークショップ(4)

プロジェクトの自己評価

担当理事：池田 満之

1)　外部協力のもとで、組織の現状分析と 2014 年までの戦略・体制づくりを行うことができた。
2)　組織基盤に必要な自己財源確保の手だての検討が不十分で、今後の課題として残った。

ESD-J 2011 年度活動履歴

4月3日	第1回理事懇談会 開催
4月3日	第1回ESD×生物多様性プロジェクト企画検討会議 開催
4月7日	東日本大震災支援全国ネットワーク会議 出席
4月7日	RQ市民災害救援センター会議 出席
4月15日	ESDレポート26号 発行
4月19日	「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム理事会 出席
5月14日	第1回理事会 開催
5月14日	第2回理事懇談会 開催
5月14日	第2回ESD×生物多様性プロジェクト企画検討会議 開催
5月20日	『未来をつくるBOOK』第1回企画会議 開催
5月28日	『未来をつくるBOOK』第2回企画会議 開催
5月29日	エコ情報交流会 ブース出展
6月11日	『未来をつくるBOOK』第3回企画会議 開催
6月16日	ESDレポート27号編集会議 開催
6月25日	2011年度通常総会
6月25-26日	ESD-J全国ミーティング2011 in 仙台 開催
6月27-28日	被災地視察およびボランティア活動（ESD-Jの会員等による有志活動）
7月9日	ワークショップ「2014年目標と行動計画を議論しよう」開催
7月9日	第3回理事懇談会 開催
7月9日	『未来をつくるBOOK』第4回企画会議 開催
7月13日	リオ＋20国内準備委員会設立会合・第1回会合 参加
7月14日	エコ×エネ University Cafe in SHIBUYA 2011 講師派遣
7月21日	『未来をつくるBOOK』第5回企画会議 開催
7月26日	環境省 ＋ESDプロジェクト普及委員会第1回幹事会 開催
8月11日	「ESDの10年・世界の祭典」事業化ワークショップ 実施
8月23日	リオ＋20国内準備委員会第2回会合 参加
8月25日	ESDレポート27号 発行
9月1日	リオ＋20国内準備委員会・第1回ワークショップ 参加
9月3日	ESDフォーラム2011（名古屋）参加
9月4日	エコメッセ2011 in ちば ブース出展
9月14日	リオ＋20国内準備委員会第3回会合 参加
9月17日	第4回理事懇談会 開催
9月17-18日	ESDの10年・地球市民会議2011（愛知）参加
9月29日	環境省 ＋ESDプロジェクト普及委員会総会 開催
10月2日	ESD学びあいフォーラム（松山）参加
10月2日	リオ＋20国内準備委員会・第2回ワークショップ 参加
10月11日	リオ＋20国内準備委員会第4回会合 参加
10月16日	＋ESDプロジェクト全国学びあいフォーラム2011 開催

11月6日	第5回理事懇談会 開催
11月12日	ユネスコスクール全国大会 参加＆ブース出展
11月13日	第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO分科会 実施
11月25日	『未来をつくるBOOK』発行
12月4日	ESD学びあいフォーラム（会津）参加
12月9日	ESD関係機関間情報交換会 参加
12月9-10日	統営ESD国際フォーラム 参加
12月10日	第2回理事会 開催
12月16-18日	エコプロダクツ展 出展
12月20日	ESDレポート28号編集会議 開催
1月8-9日	第6回理事懇談会 開催
1月14日	第3回理事会 開催
1月14日	臨時総会 開催
1月21日	京都環境教育ミーティング 参加
1月23日	関東地域ESDコーディネーターのあり方検討会 開催
1月28日	ESD東北学びあいフォーラム（青森）参加
1月30日	ESD-J理事選挙 公示
2月1日	リオ＋20国内準備委員会第5回会合 参加
2月2日	北海道ESD学びあいフォーラム（札幌）参加
2月17日	＋ESDプロジェクト検証検討委員会 開催
2月27日	関東ESD学びあいフォーラム（東京）開催
2月28日	＋ESDプロジェクト普及委員会第2回幹事会 開催
3月6日	ESD×集い・学びあい・つながりあい（岡山市）参加
3月10-11日	アジアのNGOによるESDネットワーク・バンコクワークショップ 開催
3月12日	ESD-J理事選挙 開票
3月15日	NGO連携会合 参加
3月20日	第4回理事会 開催
3月20日	ESD×生物多様性プロジェクト編集会議 開催
3月26日	ESDレポート28号 発行

団体正会員・賛助会員・特別賛助会員・連携交流団体名簿

団体正会員：87 団体

（公財）オイスカ
（公財）日本野鳥の会
（公財）ボーイスカウト日本連盟
（公財）キープ協会
（公財）公害地域再生センター（あおぞら財団）
（公財）日本ユニセフ協会
（公財）日本 YMCA 同盟
（公財）ユネスコ・アジア文化センター
（一財）京都ユースホステル協会
（財）日本環境協会
（財）北海道国際交流センター
（公社）ガールスカウト日本連盟
（公社）青年海外協力協会（JOCA）
（公社）日本環境教育フォーラム
（公社）日本ユネスコ協会連盟
（一社）あいあいネット
（社）日本ネイチャーゲーム協会
（社）農山漁村文化協会
（社）部落解放・人権研究所
宗教法人 櫻木神社
国立大学法人 岩手大学
国立大学法人 筑波大学 農林技術センター
国立大学法人 北海道大学
岡山大学ユネスコチュアプログラム
立教大学 ESD 研究センター
学校法人 日本自然環境専門学校
岡山市
NPO 法人 岩木山自然学校
NPO 法人 エコけん
NPO 法人 エコ･コミュニケーションセンター（ECOM）
NPO 法人 ECOPLUS
NPO 法人 えひめグローバルネットワーク
NPO 法人 オーシャンファミリー海洋自然体験センター
NPO 法人 開発教育協会
NPO 法人 環境市民
NPO 法人 環境文化のための対話研究所
NPO 法人 環境まちづくりネット
NPO 法人 くすの木自然館
NPO 法人 国頭ツーリズム協会
NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター
NPO 法人 グローバルプロジェクト推進機構 JEARN
NPO 法人 国際自然大学校
NPO 法人 コミネット協会
NPO 法人 コモンビート
NPO 法人 これからの学びネットワーク
NPO 法人 しずおか環境教育研究会（エコエデュ）
NPO 法人 自然育児友の会
NPO 法人 自然体験活動推進協議会（CONE）
NPO 法人 持続可能な社会をつくる元気ネット
NPO 法人 生態教育センター
NPO 法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議（CASA）
NPO 法人 地球と未来の環境基金
NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティー
NPO 法人 フォーエバーグリーン
NPO 法人 ほっとねっと
NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし
NPO 法人 やまぼうし自然学校
アース・ビジョン組織委員会
エコテクノロジー研究会
岡山ユネスコ協会
環境・国際研究会
環金武湾地球温暖化対策地域協議会
北九州 ESD 協議会
くりこま高原自然学校
こくさいこどもフォーラム岡山
堺市女性団体協議会
サス塾
サステナブル・アカデミー・ジャパン
ジャパン・フォー・サステナビリティ
世界女性会議 岡山連絡会
仙台いぐね研究会
仙台広域圏 ESD・RCE 運営委員会
創価学会平和委員会
田んぼの楽校
日本アウトドアネットワーク
日本環境ジャーナリストの会
日本ソーラーエネルギー教育協会
日本ホリスティック教育協会
ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン（GCPEJ）
平和の文化をきずく会
ホールアース自然学校
ほっと村
緑の環・協議会
養生庵
（株）日本エコプランニングサービス
（株）フルハシ環境総合研究所
（有）プラス・サーキュレーションジャパン

賛助会員：8 団体

（公財）旭硝子財団
（公財）損保ジャパン環境財団
王子製紙（株）
（株）損害保険ジャパン
東洋製罐（株）
パナソニック（株）
（株）日立製作所 情報・通信システム社
（株）モンベル

特別賛助会員：1 団体

（株）日能研

連携交流団体：5 団体

国際協力機構 地球環境部
JICA 地球ひろば
国際連合広報センター
国連人口基金東京事務所
国際連合大学高等研究所

（2012 年 3 月 31 日現在）

役員および実施体制

1.役員および職員

代表理事	重 政子	NPO法人 自然体験活動推進協議会 /(社)ガールスカウト日本連盟
副代表理事	池田 満之	岡山ユネスコ協会
理事	池田 誠	(財)北海道国際交流センター
	大島 順子	琉球大学
	櫛田 敏宏	愛知県総合教育センター/EPO中部ESD中部イニシアティブプロジェクト
	小金澤 孝昭	宮城教育大学/仙台いぐね研究会
	枚本 育生	NPO法人 環境市民
	鈴木 克徳	金沢大学
	竹内 よし子	NPO法人 えひめグローバルネットワーク
	三隅 佳子	北九州ESD協議会
	村上 千里	認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議
	森 良	NPO法人 エコ・コミュニケーションセンター
	山下 邦明	九州大学/(社)サルボダヤJapan
	吉澤 卓	個人会員
監事	浅見 哲	税理士 浅見哲事務所
	吉岡 睦子	吉岡睦子法律事務所
顧問	阿部 治	立教大学ESD研究センター / (社)日本環境教育フォーラム
	池田 香代子	ドイツ文学翻訳家・口承文芸研究家
	岡島 成行	(社)日本環境教育フォーラム 理事長
	坂本 尚	
	CWニコル	作家
	廣野 良吉	成蹊大学名誉教授

事務局	事務局長	村上 千里
	スタッフ	(常勤) 長澤 正嘉、村田 幸子(1月まで)、野口 扶美子(8月まで) (非常勤)小川 理恵、中山 薫(2月から)
	契約スタッフ	野口 扶美子(9月から)、吉澤 卓

2.実施体制

	主な担当理事
震災復興・地域再生支援	小金澤 孝昭、森 良、吉澤 卓、重 政子
学校におけるESD推進	山下 邦明、櫛田 敏宏、鈴木 克徳
地域におけるESD推進 およびコーディネーターの社会化	森 良、池田 満之、大島 順子、三隅 佳子、竹内 よし子、 櫛田 敏宏、池田 誠
国際ネットワーク推進	鈴木 克徳、山下 邦明
普及啓発・情報収集・提供	吉澤 卓、枚本 育生、池田 誠
その他の事業	事務局

地域担当理事	池田 誠(北海道)、小金澤 孝昭(東北)、森 良(関東)、鈴木 克徳(北陸)、 櫛田 敏宏(東海)、枚本 育生(近畿)、池田 満之(中国)、竹内 よし子(四国)、 三隅 佳子・山下 邦明(九州)、大島 順子(沖縄)
組織運営理事	重 政子、池田 満之、鈴木 克徳、村上 千里

2011 年度予算・決算見込

収支計算書　＜2011年4月1日～2012年3月31日＞

単位：円

I収入の部	2011年度予算	2011年度決算見込	差異
1　会費収入	**2,750,000**	**3,981,000**	**-1,231,000**
正会員　会費収入	1,500,000	2,155,000	-655,000
準会員　会費収入	500,000	576,000	-76,000
賛助会員　会費収入	750,000	1,250,000	-500,000
2　事業収入	**18,400,000**	**15,797,920**	**2,602,080**
書籍販売	400,000	445,270	-45,270
イベント・講座	100,000	192,000	-92,000
受託事業	17,000,000	14,215,600	2,784,400
研修・講師派遣	800,000	332,350	467,650
その他事業（震災関連含）	100,000	612,700	-512,700
3　助成金等収入	**21,960,000**	**12,328,000**	**9,632,000**
地域プロジェクト助成金（地球環境基金）	8,200,000	6,355,000	1,845,000
国際プロジェクト助成金	5,000,000	1,313,000	3,687,000
震災プロジェクト助成金	5,000,000	0	5,000,000
基盤強化プロジェクト助成金	―	1,000,000	-1,000,000
協賛金収入	3,760,000	3,660,000	100,000
4　寄付金収入	**1,500,000**	**1,250,326**	**249,674**
寄付金収入	1,500,000	1,250,326	249,674
5　借入金収入	**10,000,000**	**9,500,000**	**500,000**
短期借入金収入	10,000,000	9,500,000	500,000
6　その他の収入	**0**	**1,781**	**-1,781**
受取利息	0	1,290	-1,290
雑収入	0	491	-491
仮払い収入	0	0	0
当期収入合計（A）	**54,610,000**	**42,859,027**	**11,750,973**
前期繰越収支差額	23,290,308	23,290,308	23,290,308
前期繰越収支差額調整額			
収入合計（B）	77,900,308	66,149,335	35,041,281

II支出の部	2011年度予算	2011年度決算見込	差異
1　事業費	**38,275,000**	**24,762,748**	**13,512,252**
震災復興関連	9,400,020	2,598,956	6,801,064
学校におけるESD推進	733,800	179,297	554,503
地域におけるESD推進	9,571,900	6,470,352	3,101,548
普及啓発・情報提供	12,656,440	11,831,331	825,109
国際ネットワーク	5,782,700	2,566,447	3,216,253
その他事業	130,140	1,116,365	-986,225
2　管理費	**8,121,700**	**7,641,618**	**480,082**
人件費	2,882,500	2,941,079	-58,579
退職金	130,000	112,000	18,000
福利厚生費	563,000	286,424	276,576
監査報酬	260,000	260,000	0
会議費	10,000	2,970	7,030
交際費	20,000	0	20,000
通勤費	136,200	195,630	-59,430
旅費交通費	100,000	105,110	-5,110
通信運搬費	750,000	676,799	73,201
消耗什器備品費	50,000	0	50,000
消耗品費	250,000	172,250	77,750
印刷製本費	10,000	7,463	2,537
水道光熱費	120,000	134,253	-14,253
賃借管理費	2,160,000	2,094,112	65,888
支払手数料	120,000	122,091	-2,091
支払利息	40,000	63,000	-23,000
負担金支出	10,000	0	10,000
為替差損	0	0	0
雑費	20,000	33,480	-13,480
租税公課	420,000	364,957	55,043
法人税・事業税	70,000	70,000	0
3　固定資産取得支出	**0**	**0**	**0**
出資金取得支出	0	0	0
4　借入金返済支出	**14,000,000**	**14,000,000**	**0**
短期借入金返済支出	14,000,000	14,000,000	0
5　その他の支出	**200,000**	**0**	**200,000**
予備費	200,000	0	200,000
当期支出合計（C）	**60,596,700**	**46,404,366**	**14,192,334**
当期収支差額（A）－（C）	-5,986,700	-3,545,339	-2,441,361
次期繰越収支差額（B）－（C）	17,303,608	19,744,969	20,848,947